

海外留学を考えている若い先生へのメッセージ

University of Texas, MD Anderson Cancer Center

富原 英生（平成 18 年卒）

初めにこの原稿を準備している現在、世界中が新型コロナウイルスの流行による深刻な状況であり、私が留学していた米国の施設も一時的な閉鎖状態となりました。一刻も早く新型コロナウイルスの感染流行が収束することとこの先、犠牲者になるべく少ないことを御祈念致します。

私は今年で海外留学便りを担当させていただくことが3年目になります。今回は、「海外留学を考えている若い先生へのメッセージ」という御題をいただきましたので、2年6か月の研究留学を通じて私が感じた個人的な意見を忌憚なく報告させていただきたいと存じます。

そもそも大学院に帰学する以前の私は、「外科医が留学するなんて、修練の時間を失うだけで時間の無駄。病気の原因や分子生物学的な背景なんて頭の良い内科医の仕事だ」とさえ考えていました。留学に対する考え方が大きく変わったのは、成人病センターでの後期レジデントの経験、またその期間に知り合った諸先輩方の影響であると思います。むしろ博士課程修了後の進路として海外留学を希望したことが大阪大学大学院に帰学した大きな理由の一つでした。大学院終了後は、紆余曲折ありましたが、どうにか、2017年8月より、米国テキサス州ダラスにある Baylor Research Institution において Research Fellow として留学を開始させていただくことができました。同施設では、Public Data Base を使用し、消化器固形癌について悪性度や予後など様々な観点からバイオインフォマティックアプローチを用いて候補となる遺伝子を選出し、豊富な臨床検体を用いて transcriptional level でバイオマーカーとしての有用性、妥当性について Validation を行いました。そして2018年2月末に、縁あって同じテキサス州内のヒューストンにある、MD Anderson Cancer Center に施設を移りました。同施設では Genomic Medicine という部門で Giulio Draetta 教授のもと Postdoctoral Fellow として2020年3月までさらに2年間、膀胱癌を中心にさまざまな研究を行わせていただくことができました。



Farewell at MD Anderson Cancer Center hosted by Professor Giulio Draetta

若手の先生に対するメッセージとしまして、私にとって海外留学は様々な面から得難い貴重な経験となりました。まず海外の施設で給与をいただいて働くことは、私の想像をはるかに超えて大変なことでした（時間的にも、精神的にも）。私の所属した研究室は非常に大きなところで、同じ研究室の中にも私と同じ立場のポスドクだけでなく、Graduate student や Research Assistant、Research Fellow、Instructor、Associate など様々な職種がありました。またアメリカ、イタリア、中国、エジプト、東欧、エチオピア、トルコなど本当に様々な国々出身のメンバーでラボが構成されており総勢 30 名弱のメンバーで毎週カンファレンスを行いました。そうしたオリジンの文化的背景の違いや先に述べた職種の違いからでしょうか仕事に対する姿勢についても様々でした。また人間関係を築くために自分から積極的にコミュニケーションをとることがとても重要であったように思います。幸い最後には同じフロアーで働くほぼ全てのメンバーと知己になることができ働きやすい環境となりました。留学は想像していた以上に大変でしたが、機会があれば是非行ってください。万事塞翁が馬といいますが、海外留学の経験が後々吉となるかそうでないかはわかりません。それは帰国後の頑張りによるのだと思います。それでも海外留学が大きな経験になることは間違いないと思います。

最後にこの貴重な留学の機会を与えてくれました、森正樹前教授、土岐祐一郎教授、江口英利教授、私を受け入れてくれました、Ajay Goel 教授、Giulio Draetta 教授、そして留学をサポートしていただきましたすべての方々に感謝申し上げます。